

「コンビニ事変-前編」

—二稿—

2024/10/14

脚本 太郎

〈人物表〉

荒屋ヒトシ

(17)

高校二年生

袖沼サトシ

(17)

高校二年生

伊吹サヤカ

(17)

コンビニ店員

木原春人

(34)

元コンビニ店長。変質者

田原茂

(55)

コンビニ店長代理

高城足男

(55)

教師。変質者

ログライン (前編)

退院したサヤカに話しかけるのを躊躇っていたヒトシが、サトシに鼓舞されて話しかけようとするも、やはり失敗する。

ログライン (全体)

退院したサヤカに話しかけるのを躊躇っていたヒトシが、サトシとの殴り合いを通して決意を固める。

ねらい

- ・ヒステリーを笑いに。
- ・緩い三角関係を描く。

1. 中学校・三階・廊下・窓の前(昼)

廊下に並ぶ、腰高の引き違い窓の内の一つ。

しばらくは生徒たちによる日常的な喧騒が聞こえて
いるだけ。

やがて激しくドアが開く音がする。

少女の絶叫と間隔の短い足音が聞こえ始め、徐々に
大きく。

血まみれのカッターナイフを片手に走ってきた伊吹
サヤカ(15)が勢いよく窓に激突。

窓が窓枠から外れてサヤカと一緒に落下していく。

数秒してサヤカの絶叫が止む。

『ドサツ』という音。

弾けるように悲鳴が起こる。

2. 中学校・三階・廊下(昼)

悲鳴はまだ続いている。

皆サヤカが飛び降りた窓の方を見ている。その中に
荒屋ヒトシ(15)と袖沼サトシ(15)も居り、

茫然としている。

何人かの教師たちが慌ただしく階段を下りていく。

いくつかの教室から生徒たちが出てくる。

悲鳴は止み、ざわめきが変わる。

ドアが開け放たれた生徒指導室から、出血した首筋
に手を当てた高城足男(55)がゆっくりと這い出
てくる。

しばらく誰も高城に気付かない。

やがて皆が高城に気づき、先ほどよりは控えめな悲
鳴が上がリ、ざわめきも大きくなる。

一人の女性教諭が高城に近付き、しゃがみこむ。

女性教諭「高城先生！ 何があったんですか？」

高城「……ませて……」

女性教諭「え？」

高城「死ぬ前に、最後にもう一回だけ……おっぱい揉ませて……」

…」
女性教諭「(嫌悪と困惑を滲ませて)は? ……はああ?」

3. 高校・教室(昼)

昼休み中、明るい喧騒に包まれている教室。
弁当を机で広げたり、教室を出ていく生徒たち。

T「二年后」

荒屋ヒトシ(17)が袖沼サトシ(17)の机に手
をつけて真剣な表情で言う。

ヒトシ「一生のお願いだ。サトシ、お金を貸してくれ」

サトシ「てめーの一生のストックは何個あるんだよ」

ヒトシ「頼む、昼飯も買えないくらい金欠だ」

サトシ「コンビニのバイトはどうしたんだよ」

ヒトシ「ばっくれたから給料は入らなかった」

サトシ「お前なあ……」

ヒトシ「いや違うんだ。やむにやまれぬ理由があったんだ。実は
……」

4. (回想)コンビニA・店内(夕)

レジでは店長である木原春人(34)が、焦点の合

わない目で虚空を眺めながら会計をしている。

待たされている客はイライラしている。

ヒトシはレジ近くの商品棚で品出しをしている。

木原がボックスティッシュを取り、バーコード

リーダーを当てる。

木原 「大量消費社会の唾棄すべき弊害が生み出した大して必要
のない紙屑が一点」

木原、一瞬だけ客と目を合わせる。

ボックスティッシュを置く。

続けてカップ麺にバーコードリーダーを当てる。

木原 「深夜に大してお腹もすいてないのに何となく口が寂しい
という理由で作ったはいいもの出来た頃には食う気が

失せ、微妙な気持ちで消費される運命のカップ麺が一点」

木原、一瞬だけ客と目を合わせる。

カップ麺を置く。

続けてコンドームを手に取り、バーコードリーダーを当てる。

木原 「えー……ゴミが一点」

木原、コンドームを投げ捨てる。

客、驚いた表情。

木原、続けて漫画雑誌を手に取りバーコードリーダーを当てる。

木原 「いい歳してこんな稚拙なもん読んでる奴はバカ。絶対Fラン卒」

木原、漫画雑誌を放り投げる。

お辞儀をして出入口を指し示す。

木原 「バカにお売りする商品はございません。どうかお引き取りください、お客様」

客 「せめて会計は終わらせろよ！」

客がレジを叩いて怒鳴る。

客 「さっきから何ハラスメントなんだよこれ。客を馬鹿にしてんのか？」

木原、レジスターを投げ飛ばす。

木原 「うるっせーなあ！ どいつもこいつもお！」

そして地団太を踏んで叫ぶ。

木原 「もう限界だよ何で俺がこんな仕事しなくちゃいけないんだよ！」

木原以外の全員がドン引きして硬直する。

木原、制服を脱ぎ捨てる。

木原 「これ以上お前らみたいなFランに構ってられるかよ！俺は早稲田志望だったんだぞ！」

ヒトシ 「志望？ あくまでも？」

木原、髪を掻きむしって悲痛そうに、

木原 「高校のときあんなことさえなければなあ！」

ヒトシ 「何があっただらう……」

木原、レジを飛び越える。

木原 「とにかく本当の俺はこんなじゃねーんだ！俺は自分を解放してやる！」

木原、ベルトを外してズボンのチャックを下ろしながら外に飛び出していく。

ヒトシ「店長？ 店長ー！」

5.

(回想) コンビニA・バックヤード(夕)

店員一同、田原茂(55)と対面して立っている。

田原は見るからに生氣のない中年男である。

T「二時間後」

田原「急遽店長代理を承ることになった本社で社内ニートやってる田原です」

田原、軽くお辞儀をする。

店員たちも軽くお辞儀を返す。

田原「前の店長は駅前で自分の陰部を撮影した写真をポケットティッシュみたいに配ってたところを捕まりました」

ヒトシM「店長——！」

田原「最後の言葉は『前科なんて怖くねえ。どうせ俺みたいなゴミは生きてるだけで犯罪者扱いなんだ』だったそうです」

ヒトシM「店長——！」

店員一同、呆然としている。

ヒトシM「凄いスピードで狂気が展開していったと思ったら呆気なく収束した……」

6.

高校・教室(昼)

ヒトシ「それでその店長代理もそのあとクレマーの頭にレジスター叩きつけて逮捕されちゃったんだ。ぼくはもう怖くなつて逃げたよ」

サトシ「お前話盛ってるだろ？」

ヒトシ「盛ってないよ。君は観てないかもだけどニュースにもなったよ」

サトシ「そっかあ。うーん……まあ、春だからなあ」

ヒトシ「春というのは恐ろしい季節だよ」

サトシ「(遠くを見るように) サヤカが飛んだのも春だったしな」
ヒトシ、咎めるようにサトシを睨む。

ヒトシ「やめろよそんな話」

サトシは無視するように椅子を立ち上がり、教室の出口へ向けて数歩進む。

そして立ち止まり、ヒトシを振り返る。

サトシ「ところでヒトシ、金を貸してやっても良いが一つ条件がある」

ヒトシ「条件？」

サトシ「どうせまたいつものコンビニに行くんだろうが、だとしたら今日こそあいつに何かしら話しかけろよ。自分から

きっかけ作んなきゃ、このまま一生忘れられたままだぞ」

ヒトシ、ギクリとして、

ヒトシ「お前に言われなくなたって……」

サトシ「そう言って今まで『袋いりますか？』『アッアッだだだだだ大丈夫ですう』以外の会話してないだろ」

ヒトシ「いくら何でもそこまですもってはないだろ」

7. コンビニB・店内(昼)

レジにヒトシとサトシが並んでいる。

店員である伊吹サヤカ(17)がヒトシの商品の会計をしている。どこかポーツとした雰囲気。

ヒトシはひどく緊張している。

サヤカ「……袋要りますか？」

ヒトシ「アッアッアッ……だ、だだ、だだだだだだ大丈夫ですう」

サトシM「悪化してんじゃん」

サヤカ「……レシートは要りますか？」

ヒトシ「け、けけけけ、結構でしゅう！」

ヒトシを後ろから睨み付けているサトシ。

それに気づいてギクリとするヒトシ。

ヒトシ「あっ、あのー！」

サヤカ、首をかしげる。

サトシ、期待する表情。

ヒトシ、苦笑いでレジに置かれたおにぎりを差し出して、

ヒトシ「おにぎり温めてください」

サトシ、顔をひきつらせる。

サヤカ、何か言いたそうにしているが何も言わない。

8.

商店街（昼）

地方都市的な小規模な商店街。控えめなアーケードで覆われている。

立ち並ぶ店々の内の一つにコンビニがある。

そのコンビニから出てくるヒトシとサトシ。

二人は速足で歩きながら言い合いを始める。

サトシ「なくても今すぐ金を返せお前は！」

ヒトシ「話しかけただろ！」

サトシ「十割事務的い！ しかもおにぎり温めるって何だあんま

聞いたことないぞ」

ヒトシ「何だ君はおにぎり温める派の人間には人権がないとでも

言うつもりか？」

サトシ「そこまで言っではないだろうが！」

（つづく）